

ラオプスキュラを使った「Wandering Camera」シリーズなどは、カメラの始原的光学性の可能性を、現代に問い直す実験的な試みである。写真装置に焦点をあてることを通じて、光、時間、空間、身体をテーマに、見えるものと見えないもの、固有性と普遍性を問いつける作品を発表している。

▼作家の言葉

長時間露光や針孔写真、そしてカメラオプスキュラをもとに、写真が写ることと見えることのズレを媒介にして、生命の在りさま、その存在を表現したいと考えています。不在というものは、むしろ在ることを希求しイメージさせるものではないでしょうか。初期の身体性にこだわった光のシリーズから、最近では新たな写真術によるイメージの生成を試みているのですが、写真美術館の「そこにいる、そこにいない」展を評価いただき大変に光栄です。

今回受賞のお知らせを受け、内心、昨年まで審査会に属していた立場として、心穏やかではなく、その是非について逡巡しました。しかしながら、最終的には90年の新人作家賞受賞以来25年ぶりに新作を東川町に展示したいという欲望が勝りました。写真の町東川賞審査会の皆さま、東川町の皆さま、そして写真美術館の皆さま、また家族をはじめお世話になった皆さま、今回の受賞、衷心より感謝申し上げます。

のわずかな時間に訪れる空一面が青く染まる瞬間をまとめた「BLUE MOMENT」(小学館、2007年)は、その魅力的で幻想的な写真で多くの人を魅了した。

近年発表した「Sense of Japan」(ノストロ・ボスコ、2009年)、「Shinshu」(信濃毎日新聞社、2011年)、「SEKISEI」(丸善出版、2013年)は、日本の風景に帰した新たな試みとして注目される。北海道北斗市にあるセメント工場を撮影した写真集「CEMENT」(ノストロ・ボスコ、2010年)は、即物的ともいえる眼差しによって、日本を代表する巨大産業の現実とその細部に宿る美を浮き彫りにした。

▼作家の言葉

まだ雪が残る3月、講演の仕事で北海道北斗市を訪れた私は、巨大なセメント工場と出合いました。日本を代表する産業が、北の大地にしっかりと根を下ろしている姿に深く心を打たれ、その時はじめて、日本の一つの風景として「テーマにしたい」と考えたのです。

その年の夏、会社から正式な許可が下りると、数週間北斗市に滞在し、撮影を行いました。鉾山、工場、棧橋で目にするすべてのものに、新鮮な驚きと感動が満ちており、同時に究極の「美」を感じ取った私は、4×5インチの大型フィルムカメラと大型センサーを持つデジタルカメラを使い、1

【新人作家賞】
春木麻衣子(はるぎ・まいこ)
東京都在住



受賞理由 写真展「みる」ことについての展開図「taro nasu gallery」(2014年)に至る一連の作家活動に對して

1974(昭和49)年、茨城県生まれ。1995(平成7)ー1996(同8)年、玉川大学文学部在学中にゴールドスミス・カレッジ交換留学。1997(同9)年、同大文学部芸術学科卒業。

主な展覧会に「六本木クロッシング2007:未来への脈動」(森美術館、2007年)、「日本の新進作家展VOL.10 写真の飛躍」(東京都写真美術館、2011年)、「あざみ野フォト・アニマル 写真の境界」(横浜市民ギャラリーあざみ野、2014年)、「みる」ことについての展開図「TARO NASU」(2014年)など。森美術館、高松市美術館、太宰府天満宮等に作品が収蔵されている。

極端にアンダーにした露出から生じた画面の大部分を覆う漆黒と、そこから溢れるまばゆい光が印象的な初の

一枚一枚でいねいに作品を生み出してきました。

セメントは、普段、われわれの暮らしに欠かせないものです。しかし多くの人々が、それがどこから来て、どのように生み出されてきたのか、意識することはありません。この一連の流れを間近で見、知識として吸収しただけでも、私はこのプロジェクトを成し遂げてよかったです。

【飛弾野数右衛門賞】
福島菊次郎(ふくしま・きくじろう)
山口県 柳井市在住



受賞理由 郷土の瀬戸内を出発点とし、広島の問題を皮切りに、戦後日本の問題を一貫して撮り続けた活動に對して

1921(大正10)年、山口県下松市に網元の四男として生まれる。1945(昭和20)年、二等兵として敗戦を迎え、翌年より郷里で時計店を営む一方、広島市の被爆者、瀬戸内離島の撮影を始める。

広島市の被爆者一家の苦闘と困窮生活を10年にわたって撮影した作品「ピカドン ある原爆被災者の記録」で、1

作品集【〇】(大和ラヂエーター製作所、2005年)は、その斬新かつ洗練された表現によって注目を浴びる。

『Possibility in portraiture』(2023現代絵画、2011年)では、建造物だけでなく、移動する人物も重要なパーツを占めることによって、境界の要素に加え時間の問題も問いつける作品になっている。剥製を被写体とした新作「みる」ことについての展開図シリーズは、意図的にひとつの被写体を様々な角度から撮影し、対象を分解し複数の視線を同一平面上で再構成したものの。「みる」という行為について、切り詰められた表現のなから、時間と空間の両側面に対する深い考察をうながしている。

▼作家の言葉

世の中は白と黒で割り切れないグレーな世界なのだということも、承知づくの前提です。

あたりまえだけれど、想像は作家の専売特許じゃない。観るひとが想像するからこそ、写真とか作品が、この世界で生きてくるのだと信じています。受賞をつくり続ける勇氣にかえます。写真を通じて出会い関わった皆さんに、こころから感謝申し上げます。

960(同35)年、日本写真批評家協会賞特別賞を受賞。1961(同36)年上京し、学生運動、自衛隊と兵器産業、三里塚闘争、公害問題、若者の風俗など、時代を象徴する多岐にわたる問題を写真に収め、雑誌等で精力的に発表した。

1982(同57)年、国家権力に対する反発から、62歳で瀬戸内海の無人島での自給自足生活をはじめ。病気のため島での生活を断念するなか、『戦争がはじまる』(社会評論社、1987年)と『瀬戸内離島物語』(同、1989年)を刊行。1989(昭和64)年の昭和天皇逝去を受け、日本の戦争責任と戦後の在り方を問う自作写真パネルによる移動写真展を開始し、現在でも各地で展示が行われている。

2003(平成15)年から文章による『写らなかつた戦後』シリーズの執筆を続ける。2012(同24)年には映画「ニッポンの嘘 報道写真家 福島菊次郎90歳」が公開される。『証言と遺言』(デイズジャパン、2013年)などの出版も相次ぐなど、戦後史の証言者として、近年新たな注目を浴びている。

▼作家の言葉

写真の創生期だったダゲレオ時代を除けば、「文化」としての 写真が民衆のものとなったのはせいぜい戦後の70年間で、その存在を町並み全体に表現した飛び切りユニークな存在が、雪に埋もれた北海道の真ん中にあるこ

【特別作家賞】
吉村和敏(よしむら・かずとし)
東京都在住



受賞理由 写真集「CEMENT」(ノストロ・ボスコ、2010年)に對して

1967(昭和42)年、長野県松本市生まれ。長野県立田川高校卒業後、東京の印刷会社に勤め、退社後、1年間のカナダ暮らしをきっかけに、写真家としてデビューする。以後、東京を拠点に世界各国、国内各地を巡る旅を続けながら、意欲的な撮影活動を行っている。

自ら決めたテーマを長い年月を費やしながら丹念に取材し、作品集として発表する一方、近年は文章にも力を入れ、雑誌の連載やエッセイ集の出版など、表現の幅を広げている。2003(平成15)年、カナダメディア賞大賞受賞、2007(同19)年、写真協会賞新人賞受賞。

カナダ東海岸にあるプリンス・エドワード島で撮影した写真集を皮切りに、これまでに30冊を超える作品集を出版した。20年間にわたる世界各地の旅のなかでとらえた、夜明け前と夕焼け後

とを知って驚いています。94歳の老齢で歩行も困難なため、授賞式には東京の娘に行ってもらうことにしました。父子家庭だった東京生活の中で、彼女は小学校時代から僕が暗室で焼いた写真を乾燥したり、スポット(修正)まで手伝ってくれる孝行娘だったからです。

さて、僕の余命もあと一年くらいです。「無駄なことをするもんだ」と自嘲しながらあれこれ身の整理をしています。人生の「整理」などできるはずもないことを思い知らされるばかりです。人の死は後に残された者の胸に刻印されるだけですが、福島菊次郎が敗戦直後から心血を注いで撮影した「日本の戦後」の膨大な記録を、これからの若者たちが国を見つめる機会に役立ててくれるなら、これほどうれしいことはありません。

写真の町東川賞審査会委員、笠原美智子氏の講評から

第31回写真の町東川賞審査会委員は次のとおり。(敬称略五十音順)

- ▼浅葉克己(アートディレクター)▼笠原美智子(写真評論家)▼楠本亜紀(写真評論家、キュレーター)▼上野修(写真評論家)
- ▼野町和嘉(写真家)▼平野啓郎(作家)▼光田由里(美術評論家)▼山崎博(写真家)